



Title	Vol.6 No.3
Author(s)	核兵器廃絶研究センター(RECNA)
Citation	RECNAニューズレター, 6(3), pp.1-4; 2017
Issue Date	2017-12-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/37926
Right	© 長崎大学核兵器廃絶研究センター

This document is downloaded at: 2019-02-23T11:08:39Z

公開シンポジウム「核の脅威にどう対処すべきか：北東アジアの非核化と安全保障」

鈴木 達治郎

2017年11月23日、東京大学において、東京大学政策ビジョン研究センターとRECNAの共催で、上記タイトルの公開シンポジウムを開催した。本シンポジウムは長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)を中心に、東京大学、広島市立大学、一橋大学等の研究者が、科研費「核廃絶実現に向けての促進・阻害要因の分析と北東アジアの安全保障」(平成27～29年度)の成果を踏まえて、今後の核の脅威への対応と北東アジアの安全保障について討論を行ったものである。

前半は研究チームを代表して、RECNAの鈴木、広瀬教授が研究成果の概要を発表した。ここでは、「非核保有国(「核の傘」国)の役割」「トラック2(非政府機関による信頼醸成措置)」「核軍縮の検証」の3つのテーマについて発表がなされた。この研究成果は「核の脅威にどう対処すべきか：北東アジアの非核化と安全保障」(仮題)(藤原帰一監修、広瀬訓・鈴木達治郎編著)と題して、法律文化社より2018年3月にRECNA叢書第3号として出版されることが紹介された。

後半は、研究プロジェクトチームのメンバーで、上記出版書の監修者でもある藤原帰一東大政策ビジョン研究センター長と、RECNA客員教授でもある太田昌克共同通信編集委員の二人に、パネリストとして参加していただき、吉田文彦RECNA副センター長の司会でパネル討論を行った。パネル討論では、まず「現在の安全保障政策における核兵器の役割」について、藤原教授からは「核兵器の役割は小さくなっているが、政策の経路依存のためにいまだに核抑止に依存している」、太田教授からは「核抑止の効果について体系的な分析研究が必要」との指摘があった。続いて日本の安全保障政策についての議論となり、藤原教授は「抑止力は必要だが、核よりも



シンポジウム講演時の鈴木センター長

(2017年11月23日 東京大学 撮影:RECNA)

通常兵器による抑止が重要」との意見を述べた。最後に北朝鮮への対応について、藤原教授は「現在進められているのは『威嚇』ではなく『強制外交』(相手側の政策変更を促すべく、強力な制裁と限定的な軍事圧力をかけること)である」点を強調し、「核を使った威嚇外交は失敗する」点を強調した。太田教授からは、RECNAの研究成果から「トラック2」の重要性が強調された。

最後に、RECNAの2教授も加えた質疑応答でも、フロアからは核軍縮の検証、日本の非核政策、ミサイル防衛などについて活発な質問、意見交換が行われた。共催して下さった東京大学政策ビジョン研究センターに厚くお礼申し上げたい。

私は、2017年6月下旬から8月末にかけてICAN(核兵器廃絶国際キャンペーン)でインターン生として仕事をさせていただいた。ICANはその名の通り核兵器廃絶に向けて精力的に活動している国際NGOであり、今年7月の核兵器禁止条約の採択に大きく貢献したとして、今年のノーベル平和賞を受賞した団体だ。私は核兵器禁止条約交渉会議の場にも足を運び、国際会議におけるICANの姿、会議のない普段のICANの姿を間近で見てきた。そこで感じたのは、継続することの大切さである。

ICANは核兵器に関する国際会議で発言権を与えられており、会議に大きな影響力を持つ団体である。私はICANが具体的にどのように動いているのか、なぜ国際会議で発言できるほどの地位にいるのかというのが非常に気になっていた。ICANのメンバーが主に行っていたのは、政府関係者らに会議場外で声をかけて一緒にお茶をする、条文に関してのICANの意見に賛同する署名を各国政府代表1人1人に話しかけて集めて回る、といったことであった。もっと高度なことをしているのではないかと想像していたが、行動自体は難しいことではなかった。肩透かしを食った感覚を覚えたが、インターン生としての時間を過ごすうちに、こうした活動がICANメンバーと政府関係者らとの間の個人的なつながりを生み、会議を傍聴するだけでは得られない情報を得ることができたり、協力関係が構築されたりするということが分かった。会議が終わった後の通常業務も、条約採択に賛成票を投じた国に、条約に署名するかの確認や署名の後押しをするようなメールを送ったり電話を掛けたりすることが主であった。



オーストラリアの国会を訪問し、議員から核兵器禁止条約への支持をとりつけるICANスタッフ（左端筆者 提供筆者）

ICANが実際にやっていることの多くは、地道なネットワーク作りであった。それは一見すると地味な行動であるが、発足以来の10年間、折れずに続けてきたからこそ核兵器禁止条約の採択、ノーベル平和賞受賞という偉業に繋がったのだろう。ICANで過ごした2か月間は、「継続は力なり」ということを身を以て強く感じさせられた時間であった。今後も核なき世界に向けたICANの地道な活動に期待したい。

(たけだ じょう、長崎大学4年)

核兵器廃絶長崎連絡協議会が主催するナガサキ・ユース代表团は、今年で6回目となり、6期生として、下記の8名が選ばれた。6期生は2018年4月～5月にジュネーブで開かれる2020NPT再検討会議第2回準備委員会に派遣される予定で、その前後、長崎から核廃絶へ向けての発信を行うために必要な活動も併せて行うことになっている。

●長崎県立大学シーボルト校 国際情報学部3年

工藤 恭綺(くどう みつき)

第4期生を経て、改めて核兵器廃絶に向けて学びを深めア

クションを起こしたく第6期生として活動するに至りました。多岐に亘る考えを広く吸収し、出前講座などを通じて皆さんと活動を共有していきたいです。

●長崎純心大学 人文学部2年 酒井 環(さかい たまき)

5期生に引き続き6期生を務めさせていただきます。5期生での経験と、活動の中で感じた様々な想いを行動に変え、今以上に自分の意見を多くの人達へ、若者へ繋いでいける、発信者でありたいと思います。

●長崎県立大学 国際情報学研究所1年

孫 明悦(そん めいえつ)

初めまして、中国からの留学生孫です。今長崎県立大学情報メディア研究科に在籍しています。これからナガサキ・ユースの一員として、もっと勉強して、経験して、自分にできることを模索したいと思います。よろしくお願ひします。

●長崎大学多文化社会学部2年

中島 大樹(なかしま たいき)

長崎大学多文化社会学部2年の中島大樹です。今回の機会を通して、10年後、100年後の良き将来のための布石となる活動をしていきます。

●長崎大学多文化社会学部2年 永江 早紀(ながえ さき)

世界中が平和になることは本当に簡単なことではないと思います。でも、そんな世界の中でもいつか、誰もが安心して「今日も幸せだったな」と感じられる日が来ることを目指して、今自分にできることをユースとして頑張っていきたいと思ひます。

●長崎大学多文化社会学部2年

原田 怜奈(はらだ れな)

私は進学がきっかけで長崎に来ました。長崎では核問題や平和教育を考える機会が多く、次第に核廃絶に貢献したい、国際情勢を学びたいと思うようになり応募しました。ユースの活動では、市民運動の重要性や各国政府の動向を学び、核問題についての知見を深めたいです。

●長崎大学多文化社会学部2年

福井 敦巳(ふくい あつみ)

私はナガサキ・ユース五期生として昨年の5月、ウィーンにて行われたNPT再検討会議準備第1回会合に参加してきました。6期生では昨年得た経験や知識を活かして、平和のアクターとしてさらに活躍していきたいと思います！！！！

●長崎大学 環境学部4年 三浦 大輝(みうら たいき)

私はこれまで長崎で育ち平和教育や祖父母からの話を通して戦争の惨さや核兵器の恐ろしさを学び知りました。本活動を通して、様々なことを新たに知るだけでなく、その場で自分にできることを考え、貢献していきたいと思います！

RECNAの活動

2017年10月1日～2017年12月31日

10月2日(月)	■国連軍縮フェローシップ研修生への講演 (中村准教授)	11月11日(土)	■外国メディア在京特派員プレスツアー RECNA訪問 (鈴木センター長)
10月8日(日) ～10月12日(木)	■International Cooperation for Enhancing Nuclear Safety, Security, Safeguards and Non-proliferation(ローマ) (鈴木センター長)	11月14日(火)	■特別公開セミナー 「ノーベル平和賞受賞団体ICAN(核兵器廃絶国際キャンペーン)の川崎哲さんに聞く:国際NGOで働くとは」 講師:川崎 哲(ICAN国際運営委員/ピースボート共同代表) 場所:長崎大学グローバル教育・学生支援棟 G3A教室
10月15日(日)	■公開シンポジウム「ハマーショルド元国連事務総長の遺産ーその現代的意義についてー」 講師:マグヌス・ローバック氏 (駐日スウェーデン大使) 場所:医学部良順会館専斎ホール	11月15日(水)	■RECNAラウンドテーブル 講師:ジャック・ハイマンズ准教授 (南カリフォルニア大学)
10月26日(木)	■日本非核宣言自治体協議会Uー40世代の交流事業講演 (広瀬副センター長)	11月23日(木)	■公開シンポジウム「核の脅威にどう対処すべきか ~北東アジアの非核化と安全保障~」 場所:東京大学伊藤国際学術研究センター
10月31日(火) ～11月3日(金)	■Cyber Security Workshop(ロンドン) (鈴木センター長)	11月29日(水) ～11月30日(木)	■国連軍縮会議(広島) (鈴木センター長)
11月4日(土)	■北海道・東北地協医学生合宿in長崎講演 (中村准教授)		

RECNAの活動

2017年10月1日～2017年12月31日

- 12月3日(日) ■JENESYS2917 太平洋島しょ国との青少年交流一行来学 (中村准教授)
- 12月6日(水) ■Journal for Peace and Nuclear Disarmament(J-PAND)発刊記者会見 (東京・長崎) (鈴木センター長、吉田副センター長)
- 12月16日(土) ■平成29年度核兵器廃絶市民講座 第5回「戦後長崎における被爆の痕跡と復興——1940年代、50年代を中心に——」 講師:桐谷 多恵子(RECNA客員研究員) 場所:国立長崎原爆死没者追悼祈念館
- 12月22日(金) ■ナガサキ・ユース代表代第6期生任命式

お知らせ

ノーベル平和賞受賞記念 特別市民セミナー

「核兵器禁止条約をどう活かすか～ナガサキからのメッセージ～」

基調講演:ベアトリス・フィン

(ICAN(核兵器廃絶国際キャンペーン)事務局長)

パネリスト:川崎哲(ICAN国際運営委員)

朝長万左男(核兵器廃絶地球市民長崎集会 実行委員長)

今西 靖治(外務省軍縮不拡散・科学部 軍備管理軍縮課長)

日 時: 2018年1月13日(土) 13:30～16:30

場 所: 長崎原爆資料館ホール

※受講料は無料、同時通訳あり、要参加申込。

(以下からアクセスして参加申込を行ってください)

UR:<https://goo.gl/forms/IVXoHDKe0NrPw8Ef1>



平成29年度核兵器廃絶市民講座

「核兵器のない世界をめざして」

第6回 「『ゴジラ誕生』:私たちの核兵器イメージ」

講 師: 広瀬 訓(RECNA副センター長)

日 時: 2018年1月20日(土) 13:30～15:30

場 所: 国立長崎原爆死没者追悼祈念館

※受講料は無料、参加申し込み不要。

編集後記

最近北朝鮮からの漂着船が注目を集めている。実は11月の核兵器廃絶市民講座を担当していただいた広島平和研究所の孫先生は、韓国政府で働いていた時に、漂着船の処理を担当されていたことがあるという。孫先生によれば、「正月とチュソク(日本のお盆のような行事)の前は漂着船が増えます。祝賀のための高級海産物の納入ノルマが厳しかったためです。ですから漁民は無理をします。エンジン付きの漁船が何隻もの木造船を遠い漁場まで曳航し、そこで離します。そして漁が終わるころにまた迎えに来るのです。漁をしている間に天候が変わったり、潮の流れがきつかったりすると、エンジンの無い木造船は簡単に流され、あちこちに漂着するのです。漂着船と漁民を北朝鮮に引き渡す際には、必ず積んでいる漁獲もそのまま渡します。もちろん冷蔵庫なんて積んでないですから、腐ってぐちゃぐちゃになっている場合が多いのですが、そうしないと漁民が北に戻ってから『漁をしないで、逃げようとしたのではないか』という疑いをかけられる恐れがあるからです。ちゃんと漁をしていて漂流したという証拠が必要なのです」ということ

だった。庶民の生活がこういう状態でありながら、北朝鮮が核やミサイルの開発に巨額の予算を費やすことを止める様子はない。まさに「欲しがりません、勝つまでは」を彷彿とさせる有様である。こういう国に対して「圧力」一辺倒の政策が本当に有効なのだろうか、疑問である。北朝鮮を「窮鼠」にしないためにも、どこかに「逃げ道」を用意しなければならない。

(ひろせ さとし、RECNA副センター長)

RECNA ニュースレター
長崎大学核兵器廃絶研究センター

第6巻3号 2017年12月31日発行

発行 長崎大学核兵器廃絶研究センター

〒852-8521 長崎市文教町1-14

Tel. 095-819-2164 Fax. 095-819-2165

E-mail: recna_staff@ml.nagasaki-u.ac.jp

<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/>

印刷 インテックス

©2017 長崎大学核兵器廃絶研究センター